# 第16回 鈴鹿病態薬学研究会

# ヒトでの亜鉛欠乏の現状と課題

## 講師： 児玉　浩子　先生

帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科　教授
帝京大学医学部小児科　前教授

**日時：** 令和元年11月27日（水） 17時00分より
**会場：** 鈴鹿医療科学大学（白子キャンパス） 6号館 6103教室

本講演会では、我々の身体内で必要不可欠な「必須ミネラル」の一つである**亜鉛**に焦点をあて、ヒトにおける亜鉛の働きと、低亜鉛血症や亜鉛不足などの病気について解説していただきます。奮ってご参加ください。

主催： 鈴鹿病態薬学研究会（代表：鈴木 宏治）
共催： 株式会社　ココカラファイン
事務局(問い合わせ先)：鈴鹿医療科学大学薬学部 医薬品開発学研究室　中山 浩伸
TEL 059-340-0606　e-mail nakayamh@suzuka-u.ac.jp

# 第１６回 鈴鹿病態薬学研究会

**日時：令和元年 11 月２７日（水）１７時００分より**

**会場：鈴鹿医療科学大学（白子キャンパス）６号館 6103 教室**

## ◆ 演題：ヒトでの亜鉛欠乏の現状と課題

## ◆ 講師：児玉 浩子 先生

帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科　教授
帝京大学医学部小児科　前教授

### ◆ 講演概要

ヒト（人）での亜鉛欠乏症は、1961 年、Prasad らが貧血、肝脾腫、性腺機能低下、低身長症、土食症を示す 11 人のイラン男性を報告したことに始まる。翌年には亜鉛欠乏による症状・所見であることが明らかになり、亜鉛投与で症状は劇的に改善した。1974 年に National Academy Sciences が亜鉛は人にとって必須ミネラルであると発表した。その後、多くの研究により、人における亜鉛の生体内での役割、亜鉛トランスポーターの遺伝子異常症などが明らかになっている。また、亜鉛欠乏状態の人は世界で約 20 億人いると言われている。

わが国でも、亜鉛欠乏症は決して稀ではない。むしろ高齢化社会になり増加している。このような状況を受けて、日本臨床栄養学会が「亜鉛欠乏症の診療指針 2018」を 2018 年に発表した。亜鉛欠乏の要因として、低出生体重児、低亜鉛母乳授乳、妊娠、高齢者、スポーツ、慢性炎症性腸疾患、慢性肝疾患、糖尿病、慢性腎疾患、キレート作用のある薬剤服用などがある。臨床上問題になる症状・所見は、味覚異常、皮膚炎、脱毛、褥瘡、食欲低下、男性性腺機能不全、貧血、小児では体重・身長増加不良などである。

治療法は亜鉛の投与であり、2017 年に初めて低亜鉛血症（亜鉛欠乏）で使用できる薬剤が承認された。それまでは治療薬がなかったこともあり、臨床医も亜鉛欠乏にあまり関心がなかった。診断に関して血清亜鉛値が 60μg/dL 未満が亜鉛欠乏、60-80μg/dL が潜在性亜鉛欠乏と判定基準が示されているが、十分な根拠があるとは言えない。今後の課題としてそれぞれの疾患等での亜鉛欠乏をきたす機序の解明、臨床で使用できるバイオマーカーの開発、治療による効果の検証などが考えられる。これらの課題に対する研究成果により診療指針が改定されることが期待される。

**主催：鈴鹿病態薬学研究会（代表 鈴木 宏治）**

**共催：株式会社 ココカラファイン**

事務局（問い合わせ先）： 鈴鹿医療科学大学薬学部 医薬品開発学研究室　中山 浩伸
TEL：059-340-0606,　e-mail：nakayamh@suzuka-u.ac.jp